

# メキシコの小都市メックスカルティトラン Mexcaltitlan の 都市の自立性とその将来について

*The autonomy and sustainable development in small rural settlement*

*in Mexico : case study of Mexcaltitlan*

齊藤 麻人\*

By Asato SAITO

## 1. 研究の目的と方法

本研究の目的はメキシコの小都市メックスカルティトラン Mexcaltitlan の都市の自立性とその将来について考察することである。メックスカルティトランはメキシコの首都メキシコシティの西方約 800 km の太平洋岸に位置する小都市である。この小都市は河の中の丸い小島全体に広がっている。人口約 2,000 人、河水と海水が潮の干満により交代するので漁業に恵まれており、観光資源としても特色がある。しかし、下水道施設をはじめ、島民の為、将来の都市の自立性を如何にして保持して行くべきか。この小社会の沿革と自立性、そして将来の発展の可能性及び環境整備について考察する。

本論文の構成としては、まず島の社会の全体像を俯瞰的な視点でとらえて地理的、歴史的な特徴を明らかにする。島の独特な文化を理解するにはアステカ帝国とのつながりから考えてみる事が重要である。『メキシコ人の故郷』とも言われるこの島の社会的背景を理解するには歴史を知ることが不可欠だからである。次に島の経済的存立の基盤を明らかにするべく、メックスカルティトランの経済・産業について漁業と観光産業者に対して行なった聴き取り調査の結果を元に考察する。第 4 節においてはメックスカルティトランの将来の発展に不可欠な環境整備について水道事業をとりあげた。水道は島民の悲願ではあるが様々な要因から現在まだ整備ができていない。その原因を探り、必要な政策について考える。第 5 節ではそれまでの章で得られた知見を元にしてこの島の自立性と持続的発展の可能性についてまとめてみた。水道事業をめぐる問題で明らかになったように、この島に独特の自立性のあり方が持

続的発展の方向を考える上でも重要になってくる。この二つの密接な結びつきを軸に将来の発展の展望を考察する。

研究の方法としては文献調査と現地でのインタビューによっている。文献としてはいくつかの歴史的な研究を除いてメックスカルティトランに関する社会的経済的な研究は見当たらなかったため、ほとんどをメキシコ政府による統計資料とナヤリ州・サンチャゴ郡による行政文書に依存した。しかし、調査の過程で統計資料の正確性について疑問も大きかったし、メックスカルティトラン自体が統計資料のための単位としては人口的に小さすぎたため、現地調査を重視した。インタビューとしては 1999 年と 2000 年に 2 回の現地訪問を行ない合計 11 人から証言を得ることができた。

## 2. Mexcaltitlan—島とその生活—

### (1) 自然地理的条件

メックスカルティトラン (Mexcaltitlan) はメキシコ合衆国の首都メキシコシティ (Mexico City) から約 800 km 離れた、太平洋に面したナヤリ州 (Nayarit) にある集落である。この集落はサンペドロ川 (Rio San Pedro) 河口に広がる湖沼地帯の中にちらばった島のうちの一つの上であり、周りをマングローブの生い茂る無人島に囲まれている。

島の気候は亜熱帯性であり、年間の平均気温は 23 度、例年 6 月から 12 月までが雨季に当たり、この間は水位の上昇により島内の環状道路は水をかぶり運河として活用されることから、「メキシコのベニス」とも呼ばれる。島はほぼ円形に近い形をしており、直径約 300 m、周囲約 1,000 m、面積約 70,000

\* ロンドン大学政治経済学院地理環境学部大学院

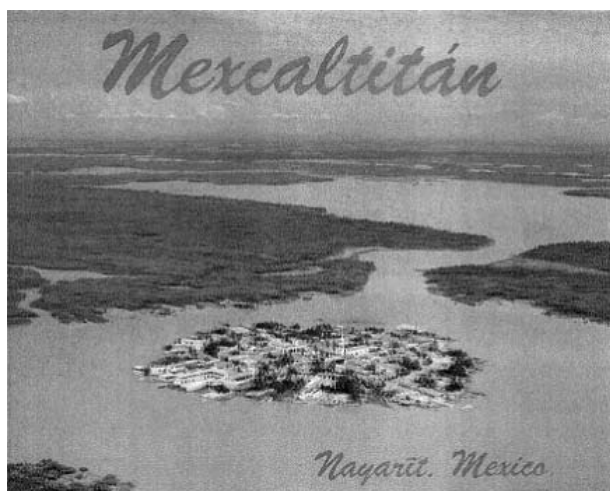


写真-1 メックスカルティトラン遠景

m<sup>2</sup>である。中央に広場とそれを囲んで教会、博物館、レストランがあり典型的な都市の様式を備えている。島にはこの他、学校、ホテル、レストラン、パブ、ビリヤード場があり島の規模の割には設備は整っている。

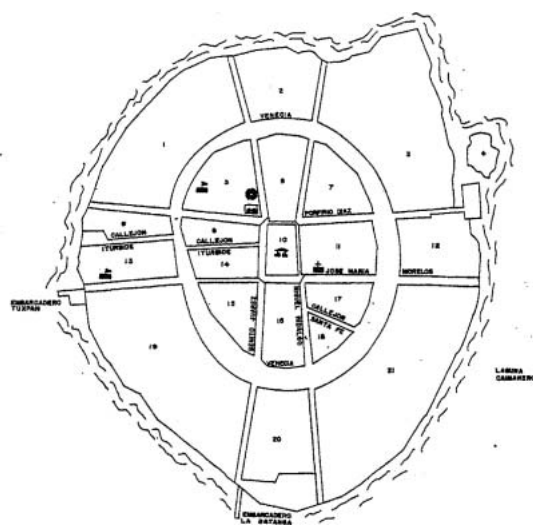


図-1 メックスカルティトランの土地利用図  
(国立地理情報統計院)

## (2) 歴史的背景

メックスカルティトランの歴史は古く、先史時代から人が住んでいたことが貝塚からの発掘によって明らかになっている。紀元1000年前後にはこの島はアストラン (Aztlán) と呼ばれアステカ人達の領地であった。伝説によれば彼らは1116年頃理想の土地を目ざして長い旅に出て、1325年にテノチトラン (Tenochtitlan) = 現在のメキシコシティに到

達しここにアステカ帝国の首都を建設した。テノチトランはアストランに似せて造られたと言われており、湖を埋め立てて造った円形の島の上に広がり、街路のパターンや運河を道として利用していること等に今のメックスカルティトランとも共通性が多い。その後島は1986年に大統領令第8号により歴史遺産地区に指定されてメックスカルティトランは政府から公式にその歴史的価値を認められた。

## (3) 交通と通信

島へ至るには州都のテピック (Tepic) からサンチャゴまで国道15号線で約1時間30分、サンチャゴから島への船着き場のあるラバタンガ (La Batanga) まで間約1時間弱である。ラバタンガからは乗合ボートが出ており所要時間15分で島へ着く。この島は湖沼地帯の真ん中にあり、島外への交通は全てボートに頼っている。また雨季になると環状道路が水没して運河となり、島内においてもボートが主要な交通手段となる。



写真-2 雨季のメックスカルティトラン  
(National Geographic, 1968)

## (4) 公共サービス

電気については本土から電線が引かれ島内の各家庭に行き渡っている。上下水道については後の章で詳しく述べることになるが、結論から言うと設備はほぼ整っているが稼動していない。島には井戸があるが水質は塩分を含み飲料に適さないため、島民は大きなボトルで飲み水を買っている。井戸水はもっぱらシャワーや洗濯用に使われている。島の中心の広場に面して教会があり、島民の宗教的文化的

ニーズにこたえている。またその隣には島の歴史、民俗学的な資料を展示した博物館もあり、この島の文化的重要性を示している。

### (5) 地域社会

島の地理的な特質や漁村という性格上、地域住民は強い共同体意識で結ばれている。狭い島内は日中常に戸外に人があふれ、道路は家の延長のように使われている。島の社会では誰もが知り合いであり、安全の確保や社会規範の維持には有効である反面、個人のプライバシーや自由な空間の確保というようなことは望むべくもない状況である。島の人口の約4分の1を占める子供達については、親だけでなく地域社会が一体になってその成長を見守るといった伝統的な気風も残っている。

## 3. Mexcaltitlan の経済と産業

### (1) Mexcaltitlan の経済

メクスカルティトランの経済は漁業を中心としている。島の周囲の川や沼は汐入の環境を生かして良い漁場になっている。島内には魚の加工工場やレストランもあるが、規模はいずれもとても小さい。

### (2) Mexcaltitlan の漁業

漁法は潮の満ち引きを利用した伝統的なもので、河に設けた柵の中にエビを誘い込みすくい上げるといった方式をとっている。養殖については現在までのところ試みられてはいないようである。漁業経済の特徴は収入が不安定なことである。漁期は主に6月から12月に限られている上に自然条件によって漁獲量も市場での値段も変化する。

裏付ける統計資料が無いものの、島での聴き取り調査によると漁獲量は全体として減少している。原因としてはこの地域のエコシステムに何らかの変化が起こっているという見方と、乱獲によってストック自体が減少したとの見方がある。島のある潮入りの湖沼地帯の生態系は海と陸の境にあり、微妙なバランスの中に保たれている。考えられる変化のメカニズムとしては、化学肥料の使用によるものがある。海岸部の侵食などで土の中の塩分が増加し、土地の収穫力の減少を補うため、化学肥料に頼ようになる。雨季の増水により地面が水をかぶると、化学肥料が水中に溶け出し、水中のバクテリア等とおし

て生態系に影響を与えてしまうことが懸念される。乱獲については効果的な漁業規制や監視システムが整備されていない、ストックについての科学的な調査が行われていないため現状把握や過去との比較ができない、漁民達の間で環境意識が薄いことなどが要因と考えられる。

### (3) Mexcaltitlan の観光産業

漁業の将来がはっきりしない中で観光産業は現金収入を得る道として期待されているが、いくつかの問題を抱えている。一つにはサンチャゴ郡やナヤリ州当局の観光産業振興に対する熱意と島民の意識のギャップである。当局としては島をこの地域のアトラクションとして地域全体への波及効果をねらっている。ポスターやパンフレットは州内の多くの場所で見られ、マーケティングが熱心に行われている。しかし、これらは住民の意向や感情をふまえない形で、言わば「頭越し」に行われているため、島民の多くは冷めた見方をしている。島はそれなりの観光地として常時客が来ているわけだが、島民の間にはそれを積極的に利用して儲けようという考えは希薄で、島民と観光客とはお互いに相手の領域を侵さないように奇妙な共存関係を結んでいる。

二つ目の問題点はマーケティングの結果作られたイメージと現実の島の姿とのギャップである。確かに上空からの航空写真に写った島の姿は目を見張らせるものがあり、『メキシコ人の故郷』という宣伝文句も好奇心をそそる。しかし現実の島の生活はひなびた田舎の漁村の域を出ないものであり、規模も小さいことから、一般の観光客を長時間引き止めておくには無理がある。彼らの期待を満たすだけの装置や仕掛けが欠けているのである。一度目は好奇心から訪れても、もう一度来ようという気にならないというのが現状のように思われる。

三つ目の問題点は設備の不備で、最大の問題は水道からの新鮮な水がないことである。島は塩分を含んだ井戸に頼っており、飲料水は外部から買って来にしても、シャワーや洗濯はこの井戸水を使う他ない。このような水準の設備のまま観光客を引き付けるのは難しいと言わざるを得ない。

### (4) エコツーリズムへの期待

しかし、これらの問題を解決するためにいくつかの新しい動きが出ている。一つにはエコツーリズム

の開発である。狭い島内だけの観光開発では限界があるので、島の周囲の自然環境を生かしながら、多様なアトラクションを用意できるという利点がある。具体的には渡り鳥の繁殖、中継地であることを利用してバードフェスティバルが計画されており、海外から（主に北米から）のバードウォッチングツアーが期待されている。



写真-3 島で見かけた渡り鳥（筆者撮影）

#### 4. 環境整備（水道事業）

##### (1) メックスカルティトランの水道供給の現状と問題点

前述したようにメックスカルティトランでは飲料水は有料の大きなボトルに、それ以外の用途については島内の井戸に頼っている。井戸は島内の環状道路の内側にあり、雨季の増水時でも通常の雨量ならば水没せずに使用可能とのことである。地理的な事情からボトル入りの飲料水は比較的高価であること、また1年をとおして気温・湿度が高く夜も寝苦しいことが多いことから、欲しい時にいつでも好きなだけ水を得られる事は島民の最も切実な願いである。

この地域一帯に水道網を整備してメックスカルティトランにも外部から水道水を引こうという計画は30年前からあり、必要な施設も建設され断続的に使用されてきた。しかし一番最近では1992年から5年間にわたって使われたものの（続けて使用されたのは最初の2年間のみ）1997年に使用を中止して現在に至っている。水道は島から約6km離れた場所に掘られた深井を水源としている。島へは対岸からの水中パイプを通じてつながり、環状道路の地下に3インチのPVCパイプが通じており、約250



写真-4 島内の井戸から水を汲む女性（筆者撮影）

軒の家（これは1995年の統計でほぼ全戸に相当）が接続している。

このようにかなりの程度の施設がありながら水道事業がうまく機能しなかった原因としては技術的なこと以外に運営や費用をめぐる問題があったためである。島まで水を引いてくるにはモーターやパイプが必要で費用は余計にかかり、その分水道料金にはね返ってくる。従って他の集落としては島まで水を引くことにあまり積極的ではなかった。島としては供給が途絶えがちで不規則であったりした（しかも島民はそれを途中の集落が水を使いすぎたためであると解釈した）ので、安定した供給が保証されるまで料金を払わないということが度々あった。結果として運営は事業としてなりたたず、調査の時点（2000年5月）では2年前から給水は中断されたままであった。

##### (2) 水道事業の今後

1999年に中断されていた水道事業の再開準備が始まった。運営については連邦と州の水道委員会が共同であったり、各集落から代表が選ばれ討議する場も整備され、当局から出された提案について話し合うことになっている。当局から一方的に水道水の供給を受けるユーザーとしての立場だけではなく、システムの運営に共に携わることが効率的、効果的な公共サービスの提供につながるという認識がこの新

しい運営システムの基本にある。またそのような住民参加による意思決定のプロセスを整備することが、長い目で見て地域の経済的成長と社会的安定に欠かせない条件であることを行政当局も理解しはじめている。

## 5. 結び—都市の自立性と持続的発展

### (1) 都市の自立性への考察

コミュニティーの「自立性」について考察する場合、社会的、経済的、政治的側面に分けてそれぞれの独立性を考えることが手がかりとなるように思われる。社会的独立性とは独自の文化的伝統を持ちそれを基盤に集団的アイデンティティーを確立していること、経済的独立性とは独自の産業基盤を持ち自給自足に近い経済構造を持つこと、政治的独立性とは自治的な行政制度が整備されていることと言い換えても良いだろう。

この集落の場合、文化的にはアステカ帝国発祥の地としてメキシコ人の『故郷』というプライドを持っている。また、島という地理的な特徴から濃密な人間関係に基づいた伝統的共同体を形成しており、独自の社会を築いている。経済的には自然環境にも恵まれほとんど全ての現金収入を漁業に頼っている。漁具や漁法も伝統的な土着のものであり、完全な自給自足ではないものの、相当の自立性を達成している。政治的にはサンチャゴ郡の行政区域に入り議会へ代表を送っているが、独自の行政組織を持っていないことから自立性は低いと言える。

### (2) 『孤立主義』と『温情主義』

島民の間には独特の『孤立主義』とでもいうような考え方があるようだ。これは彼らの漁村社会としての伝統からくるものであり、「自分達の島にきた魚をとって生活しているだけで、誰の世話にもなっていないし周りに迷惑もかけていない。従って税金を払う義務もないし、他の集落や政府当局の意向に従わなくてはいけぬ理由もない。好きなようにさせてほしい」ということらしい。事実島での聞き取り調査によると漁民の中で税金を払っているのは数えるほどしかなくて、ここでは税金を払わないのが普通のことになっている。しかし、彼らが誰の世話にもなっていないというのは事実とは異なるではないか、島内には学校もあるし、電気や電話もきて

いるのが何よりの証拠である、という反論も予想される。これに対してはメキシコ独特の『家長制的政治文化』の存在をあげておきたい。これは一種の『温情主義』であり、与党=家長は国民=子供に何らかの便宜をはかることによって政治的な影響力を獲得することができるし、国民の側もなかばそれを期待するという関係をさす（言うまでもなくメキシコの政治腐敗の温床の一つである）。この島の場合も例外ではなく、これらの施設は政党からの温情であり対価（税金）をこちらが払う種類のものではない、という（へ）理屈がついてくる。

### (3) 持続的発展へ向けて

この報告書では島の将来の発展のために必要な政策として観光開発と水道の整備をとりあげたが、どちらも文化的社会的な独自性が『孤立主義』や『温情主義』、また税金不払いの文化となってその発展をはばんでいるように思われる。観光開発にみられた島民の頭越しの政策決定や当局のイニシアティブに対する冷め切った反応、水道整備で経験された納税者意識の欠如からくる水道料金の不払いの問題もこの島の独特な文化的社会的背景を抜きには理解できない。

もっとも全てを島民のメンタリティーのせいにするのはフェアではない。永年の政治的な腐敗によって行政への不信感根強いものがあることを思えば、彼らの行動も理解できる。また漁業の停滞による変化の兆しは島の歴史の中でごく最近のことで、今まで慣れ親しんできた文化的伝統がすぐ変わるわけでもない。漁業は停滞しているとは言っても暮らしに困るというレベルではなく、島民の多くは現在の暮らしに満足し（不満な者は島に残らないとも言える）、「閉じた社会」としての利点（安全性、共同体的相互扶助、社会規範）も認識している。しかし、このままでは先の展望が拓けないというのが島の現状である。旧来の生活を守り、限られたレベルでの『一島繁栄』のまま停滞した状態で推移するのか、経済的、社会的な相互依存の中から旧来の殻を破り革新的な経済が生まれるのか、島は大事な転換期を迎えているように思われる。『孤立主義』ではなく周りの相互依存の中での真の意味での自立性が持続的発展のために求められている。

## 謝辞

本研究はIBSフェローシップ制度に基づくものであり、テーマ「メキシコの都市メクスカルティタン Mexcaltitlan の都市の自立性とその将来について」は第5回フェローシップの第2課題であった。先ずこのような興味深いテーマを設定され、浅学非才かつメキシコについては全くの門外漢である私に貴重な研究の機会を与えて下さった故井上孝理事長をはじめIBSの皆様には感謝を申しあげたい。特に本年2月に急逝された井上理事長からはご自身がかの地を訪られた時のお話をうかがったり、貴重な資料を示唆していただいたりと、たいへんお世話になった。つつしんで墓前にささげたい気持である。

現地での調査に協力をいただいた元国際協力事業団スタッフの齊藤純一氏、通訳でお世話になったダニエラ＝ボウマンさんには通訳の仕事のみならず、不慣れな筆者にメキシコ滞在中の日常的な細々としたことまでお世話になって感謝の念に堪えない。またメキシコシティではメキシコ国立自治大学のセザ＝ナバ博士とロンドン大学政治経済学院地理環境学部大学院のホルヘ＝ベラ氏にもお世話になった。

## 参考文献

- 1) 国本伊代他：概説メキシコ史，有斐閣，1984
- 2) 黒沼ユリ子：メキシコの輝き，岩波新書，1989
- 3) (財)国際協力推進協会：海外途上国別経済協力シリーズ第5版中南米 No.1 メキシコ，1996
- 4) 恒川恵一：従属の政治経済学メキシコ，東大出版会，1988
- 5) 農用地整備公団：ハリスコ州海岸地域農牧業農村総合開発計画調査主報告書，国際協力事業団，1996
- 6) メキシコ大使館ホームページ：<http://embassy.kcom.ne.jp/mexico/intro-j.htm>，2001
- 7) National Geographic (June, 1968) pp.878-887
- 8) Jerome Monnet : Mexcaltitlan, Territorio De La Identidad Mexicana: La Creacion De Un Mito De Origin, Tomado de Vuelta No.171.(メクスカルティタン、メキシコ人のアイデンティティ)
- 9) Raul Arana Alvarez and Pedro Lopez Gonzalez : Mexcaltitlan; Cronica de su Historia, Universidad Autonoma de Nayarit, 1995 (メクスカルティタンの歴史)
- 10) Gobierno del Estado de Nayarit : Plan Estatal de Desarrollo 2000-2005, El Plan del Cambio, 2000 (ナヤリ州総合開発計画、2000-2005)
- 11) Gobierno Santiago Ixcuintla : Plan Municipal de Desarrollo del Ayuntamiento de Santiago Ixcuintla, 1995 (サンチャゴ郡総合開発計画)
- 12) Secretaria De Planeacion Y Desarrollo : Gobierno Del Estado De Nayarit Todos para NAYARIT -Agenda Economica Enero 2000-, 2000 (ナヤリ州の経済統計)